

第二章 近松の生涯 ② 京都・大坂での活躍

一、公家奉公

吉江から京都に移り住むようになった近松は、やがて独立して生計を立てなければならなくなります。杉森家は、武家でも上級の家柄でしたが、彼の父はすでに浪人していましたから、武士として世にでることは不可能でした。

そこで、公家奉公に出ることになりました。近松は、はじめ一条禅閣恵観いちじょうぜんかくゑかんに仕えていましたが、近松が十九歳（数え年で二十歳）のとき、恵観が亡くなり、その後、正親町公通おとぎまぢきんみち、阿野実藤あのさねかぢ、町尻兼量まちがみかねかなどの公家に仕えました。当時公家の間では人形浄瑠璃が愛好されており、幼い時に幸若舞を見てきた近松にとって、こうした公家文化は興味深いものでした。

俳句や古典の教養も深めていきました。寛文十一年（一六七二）に出版された

二、浄瑠璃作者としての出発

近松は二十歳代の早い頃に公家奉公をやめ、芝居の世界に入っていきます。そのきっかけとなったのは、当時京都の人形浄瑠璃界で新しい世界を確立した宇治加賀掾との出会いです。宇治加賀掾は、京都四条河原に芝居小屋「宇治座」を創設した人物で、近松より十八歳年上でした。

近松は宇治座に出入りし、本格的な作者修業を行いました。この期間は、加賀掾の意図をくんで作品を書く、いわば作者となるべく勉強をしていた下積みの時代といえます。

現在、近松作品として知られている最も古い確かな作品は、天和三年（一六八三）の人形浄瑠璃の脚本『世継曾我』です。この時、近松は三十歳（数え年で三十一歳）でした。この作品は大きな評判を呼び、貞享元年（一六八四）に竹本義太夫も語りますが、同じく町中の評判となりました。その翌年、義太夫が近松に



近松の浄瑠璃本(鯖江市資料館所蔵)

執筆を依頼して上演した『出世景清』しゅっせいかげきよ以後、義太夫節ぎだゆうげしが確立されていきます。

その後貞享三年(一六八六)、近松三十三歳(数え年で三十四歳)の時の作品

『佐々木大鑑』ささきおおかがみではじめて「作者近松門左衛門」

と記しています。今なら作者名を書くのはあたりまえですが、当時作者は影の存在で、名前を名のるという事はなかったので大変非難を受けました。しかし、近松はこうして劇作家としての自分をアピールしていくようになります。

ところで、「近松門左衛門」という名前、いわゆるペンネームはどうして付けられたのでしょうか。一説ですが、まず「近松」について、近江の近松寺せきのせみまるじんじやが、その門前もんぜんにある関蝉丸神社せきのせみまるじんじや(音楽芸道の祖神、蝉丸を祭る)の別当寺べつとうでらで、自分も蝉丸を信心し芸

能にたずさわる者であるとの意味から付けられ、そして「門左衛門」は、父の市左衛門、祖父の左門という名前をあわせて称した、という説もあります。



三、歌舞伎作者としての活躍



『傾城壬生大念仏』(大正11年『近松時代風俗展覧会図録』より)

近松は歌舞伎の作品も書いています。現在知られている最も古い作品は、元禄六年(一六九三)の『仏母摩耶山開帳』ですが、同八年(一六九五)十一月の『姫蔵大黒柱』以降、坂田藤十郎との提携が強くなつていきます。近松四十二歳(数え年で四十三歳)のときです。

近松が、歌舞伎作者として力をいれるようになったのは、歌舞伎が新しい魅力を持つ演劇であると考えたからです。また、坂田藤十郎の芸術性の高さが、近松を引きつ

けたとも考えられています。

しかし、宝永ほうえい（一七〇四〜一七一二）のはじめころから藤十郎は病気がちになります。晩年は弁舌べんぜつも容貌ようぼうも衰えが見え、以前と同じような人気を保つことが困難になってきました。また、元禄十六年（一七〇三）の浄瑠璃『曾根崎心中』の当りもあり、歌舞伎における作者の地位に見切りをつけ、近松は歌舞伎を離れ、再び浄瑠璃に専念するようになりました。

なお、近年発見された道外役者金子吉左衛門どうけやくしやかねこきちざえもん（金子一高いっこう）の元禄十一年（一六九八）の日記に、近松が本名信盛でしばしば登場し、金子と近松とをはじめとする一座での芝居作りの具体的なやりとり・動向をうかがい知ることができます。



四、晩年

近松は宝永二年（一七〇五）五十二歳（数え年で五十三歳）の時、竹本座の専属となつて、翌年京都から大坂に移り、数々の名作を残します。

大坂に移つてから、竹本義太夫が亡くなるまでの十年あまりが、もつとも脂の乗り切つた時代でした。町人を題材とした作品が多くつくられ、座本竹田ざもと たけだ出雲いずもの方針を受けて、浄瑠璃にも大仕掛けのからくりなど色々な試みがなされました。

享保九年（一七二四）三月二十一日、大坂大火きょうほうにあい、妻子とともに仮住まいとなりました。そして、同年十一月二十二日、七十一歳（数え年で七十二歳）で亡くなり、尼崎あまがさきの広濟寺こうさいじと大坂谷町法妙寺たにまちほうみょうじ



近松墓石（尼崎市久々知広濟寺）

に葬ほうむられました（法名は阿耨あのくいん院ぼくい穆い矣い日にち一いち具足ぐそく居士こじ）。

近松は辞世文で、「代々甲冑かっちゆうの家に生まれながら武林ぶりんを離れ…」と述べています。終生武士の出であることにこだわりつづけ、吉江のことが頭から離れなかったのではないのでしょうか。

家族は、子供として多門たもん、景鯉けいり、松屋まつや太右衛門たえもんの名が伝えられています。近松の手紙に、多門たもんは堺さかいで座敷襖ざしきふすまなどの絵の注文を受けて書いていたとありますから、専門の画家であったようです。妻は大坂松屋まつやの出身といわれ、近松没後十年を経た享保十九年（一七三四）に死去しました。七十八歳（数え年で七十九歳）でした。

